

講評

計画を策定するときに、イメージがとても大切になります。ワークショップでは付箋を使って意見を出し合うことが多いですが、なかなかわかりづらいこともあります。今回のように写真を使ったり、ストーリーを組み立てることで、コンセプトをより具体的にイメージすることができたのではないのでしょうか。また、4つのチームに共通して「つながり」がキーワードでした。燕市でも交流が少ない、交流の場がないという話がありました。今の時代に求められていることなのかもしれません。そして、各チームの発表も登場人物が設定されていてとてもイメージしやすかったです。ぜひ日常業務でもイメージしやすい発表を心がけてください。



studio-L 小山

フォーラムのふりかえり

2月15日に行われた「しあわせづくりフォーラム」に参加した感想を共有しました。



多武さん

「仲間のいるしあわせ」のグループのまとめを担当しました。中学生から校長先生まで幅広い方がいて、一番人数が多くて最初は心配でした。しかし、皆さん意見を活発に出してくれて、とても助かりました。今回は各自が意見を発表するだけだったのですが、意見をまとめていくことができるようになるまでには、まだまだ場数が必要だと思いました。

普段の仕事では、人前で何かをやるという経験があまりないので、今後機会があれば、積極的にやることが必要だと思います。僕の担当したテーマは「遠回りしないしあわせ」という難しいテーマで、結局自分も理解できなくて、上手くまとめられませんでした。本読んだりして知識を蓄えていくのも大切だと思いました



萩原さん

木村さんからメッセージ

研修おつかれさまでした。フォーラムでの皆さんの姿はとても良かったですね。これからいろんな場を踏んで力をつけていただければと思います。1点、フォーラムで市民に自分から積極的に声掛け、呼びかけをして席についてもらえたら良かったかなと思いました。そういうことが出来るようにがんばっていきましょう。事例紹介にあった燕市のように、来年度からワークショップを進めていきます。「つばめの幸福論」のようにおしゃれなものをつくっていきましょう。しあわせづくり計画では、しあわせを実現するために自分にできることを考えていきます。そして、ワークショップの核となるような人をぜひ見つけてきてください。来年度もみなさんと自己研磨しながら、市民を巻き込みながら楽しいワークショップを進めていきましょう。



総合政策グループ
木村さん

参加者の感想

- ・住民参加を行う際にキーマンをリサーチしていた点が、ワークショップを回していくには大切だと思った。
- ・つながるというキーワードを選んだチームが多かった。
- ・しあわせの形にはいろいろあるが、1人でしあわせはなかなか作り出せない。多くの人とつながることでしあわせは生み出されるのかなと思いました。行政だけでなく、46,000人の仲間と一緒にしあわせを作っていきたい。
- ・若い人たちがいかに取り込んでいくかが大きな課題だなと感じた。
- ・フォーラムを通してまだまだだと思ったので、自己レベルアップをもっとしたいと思いました。

今後の流れ

来年度は、市民へのヒアリングやワークショップがスタートします。この研修で培った技術や知識を活かして、しあわせづくり計画を策定していきます。これまでの研修の内容をふり振り返り、書籍を読んだり、事例を調べたり、現場に出るなど、できることから取り組んでみてください。



studio-L (スタジオエル) は、代表の山崎亮が2005年に設立。地域の課題を地域に住む人たちが解決するコミュニティデザインに携わる。これまでに、いえしま地域まちづくり、海士町総合振興計画など、まちづくりのワークショップや住民参加型の総合計画づくりなどに携わっている。 <http://www.studio-l.org>

職員研修

みんなが幸せに暮らしているために自分は何ができる！

第4回職員研修



しあわせのストーリーを考えよう

高浜市では、すべての市民が幸せを感じ、いつまでも住み続けたいと思える高浜市を実現するために、市民一人ひとりが主体的に取り組むことを考えられるような計画をつくっていきます。職員研修も今日が最終回。全4回にわたる研修では、ヒアリング方法、ワークショップのファシリテーター技術を学びました。今回は、先日行われた「しあわせづくりフォーラム」のふりかえりやまちづくりを進めていく上で、コンセプトを考えることの必要性を学ぶ事例紹介がありました。そして、写真付きのワークシートを使い、しあわせのストーリーとコンセプトを考えるワークをしました。各チームが工夫を凝らして発表、しあわせづくり計画のコンセプトのヒントがたくさん出てきました。

日付 平成27年2月19日(火)
時間 9:30～12:00
会場 高浜市役所第2会議室

プログラム

- 9:30 はじめに
- 9:35 前回のふりかえり
- 10:00 レクチャー
- 10:50 テーブルワーク
- 11:55 おわりに

レクチャー

しあわせづくり計画を策定していく上で、計画の方向性を示すコンセプトを考えることはとても大切なことです。新潟県燕市で作成した「つばめ若者会議」のコンセプトブック、オランダアムステルダムで広がった「I amsterdam」に代表されるシビックプライドの事例紹介をしました。

新潟県 燕市

若手市民と市職員の混合チームによる次世代リーダー育成プロジェクト。メンバーがまちなかにヒアリングに出かけ、面白い市民を発掘したり、視察旅行に行ったり。フェイスブックを効果的に活用し、メンバー間の情報共有を図っています。20年後の燕市がどのようなまちになっていたらいいの、メンバーが考える幸福をみつめ、「つばめの幸福論 2013」をまとめました。



オランダ アムステルダム

市民が自分の住むまちに愛着や誇りを持つことを「シビックプライド」といいます。アムステルダムでは、「I amsterdam」というロゴを用いて「アムステルダムの資産は人」という考えを表現、人をメインにした写真集などを作成しています。



ブレイクタイム

「しあわせ」のコンセプトを考えるワークの前に、想像力を鍛えるゲームをしました。チームで力を合わせて「めしどりちゃん」の絵を完成させること。一人が一つのパーツを書き、隣の人に回していき、最後に「めしどりちゃん」が完成する仕組みです。まずは目を書いて、次の人がくちばしを書いて、次の人が輪郭を描いて…他の人のことを考えながらパーツを書いていかないと、アンバランスな「めしどりちゃん」になってしまいます。「なにそれ〜」「絶対ちがうよ〜」という声が出るチームも。一応、全チーム「めしどりちゃん」が完成。別のキャラクターが誕生したチームもあれば、特徴をうまくとらえたチームもあり、チームワークと想像力を鍛えることができました。



しあわせのストーリーづくり

4つのチームにわかれ、「しあわせ」という言葉を必ず入れたキャッチフレーズ、コンセプトを作成しました。そして何枚かの写真入りのシートを組み合わせて、キャッチフレーズとコンセプトを表現するストーリーを考えました。あるチームでは架空の主人公を設定しストーリーを組み立てたりと、創造力と妄想力をフル活用しました。「しあわせづくり計画」のコンセプトにつながるアイデアがたくさん出ました。

手順



コンセプトを考える



写真入りシートを選ぶ



ストーリーを考える



発表

1班 100年先もしあわせ

～世代も時空も越えたつながり高浜～

ストーリー

この高浜に高木さん一家が引っ越してきました。高木さん世帯はおじちゃんと夫婦と子ども2人。旦那は高浜のことは右も左もわかりません。おじちゃんは家にいっぱなし、奥さんは下の子の育児が不安。仕事をがんばっている旦那さんも今日は飲み会です。毛ガニが頭に乘った人と仲良くなってしあわせを感じました。今日は家族で地域の餅つき大会にやってきました。高木さん一家以外にもたくさんの家族が来ています。子どもたちは、おじちゃんおばあちゃんに手伝ってもらいながら初めての餅つき大会をすごく楽しんでいる様子。さらに餅つきを教えたおじちゃんおばあちゃんも、子どもに伝えるのが楽しいので、続けていきたいなと新たにしあわせを感じるのです。笑顔があふれて世代間の交流が楽しめるまち、高浜をこれから先もみんなに伝えていこう！世代も時空もこえたつながりを感じながら、高木さん一家は走り続けるのです。



2班 地域と世代がつながるしあわせ

～異世代の出会い・交流・伝承・思い出づくり～

ストーリー

仕事で失敗したので、居酒屋で一人で飲んでいると酔っ払いが話しかけてきました。だんだん打ち解けて楽しい時間を過ごすことができ、お店を出たころには、私は一人ではないなとあったかい気持ちになりました。次のお話は、お寺で開かれた子ども向けの地域学習会、友だちも増えたし先生以外の大人たちから話をきけてとても良い機会になりました。次は、防災訓練。自分たちのまちは自分たちで守らなければならない。大人が子どもに防災訓練の知識を伝えます。子どもはそれをみて大きな地震や災害がきたときは自分たちのまちは自分で守ります。最後はお腹が減ったなということで、お餅つき。幼稚園児がお年寄りの指導と若者の力でお餅にをつきます。お餅の食べ方にもいろいろあって、子どもが「えーっ」というものでも、食べるとなかなか美味しかったり。交流が生まれて、異世代の交流、伝承を通じて、地域と世代がつながるしあわせでした。



3班 日常でつながるしあわせ

～タカハマ LOVE STORY～

ストーリー

これはある1人の独身男性が、マラソンをきっかけに地域の人とのふれあいはぐくんでいくストーリー。33歳の独身男性が高浜シティマラソンに出るべくランニングを始めました。シティマラソンが終わってからも趣味がマラソンになり、神楽山遊歩道と稗田川沿いを走っていました。すると同じ早さで走っている女性が、2人は何度も顔を合わせているうちに世間話をする仲になり、市内のカフェで会うようになりました。そして、休日等も会うようになって、様々な地域の遊び場でたくさんの思い出をつくっていききました。次は、フレンド公園でのピクニックシーン。彼らはめでたくゴールインし、家族も増え、市内の公園でピクニックをするようになりました。一緒にピクニックしている仲間にも「お前もがんばれよ！」と激励しています。しあわせとは日常の中にあるかもしれません。名古屋にいかなくて出会いはあります。



4班 世代を超えた仲間とツナガルしあわせ

ストーリー

巷で話題の岐阜県的美濃加茂市に在住する1人の高齢者の男性の半生を追ったドキュメンタリーとなっています。「わし、四ツ葉幸吉 88歳は夜にコーヒーを飲みに出かけるのが唯一の楽しみ。しかし、これしか幸せを感じられないというのも一つ悩みであった。ふと横を見ると自分と同じく一人でブラックコーヒー（BC）を飲んでいるおなご、みゆきがおった。おたがい蟹好きということで意気投合したのじゃ。」（ここで幸吉じいさんの思い出話が始まりました。）幸吉 19歳、さち 18歳のときの写真でございます。戦後まもないころ唯一の楽しみが仲間と集まることであった。あの時のようなワクワク感をもう一度味わいと。今は亡き妻の若い頃の面影が感じられるみゆきと、近くの公園で開催されるアートイベントに参加することに。みゆきに一緒に参加しましょうと誘われ、徐々に心ときめき、しあわせを感じる幸吉であった。

